



合掌と柏手

福島 登

海員随想

長年、海技大学校で教壇に立っていた教授は、「人が気がつかないところに着目し、事物をとらえる学生は優れている」。また、「昔の教育は全部だめだと決めつけるのは良くない」と嘆(しつけ)の問題などを強調されていた。前者の言葉は、営業分野でも新開発に大いに役立つことだが、先生の授業は直接、海技試験と関係がなく、精神科学分野で学生の熱心さが欠けるやむなき事情はあったにせよ、私は恩師として思い出深い人である。

私の祖母は明治以前の生れであった。集落は貧乏な農家ばかりだった。祖母は浄土真宗(日本史にある一向宗)の檀家代表も務めていた。家の床の間には仏壇があり、本家の庭先には先祖を祭った素朴な社造り(やしろつくり)の氏神があり、集落の森には鎮守神社もあった。現在は道路付きの田園や畑は新興住宅に変わり、昔の風景がない集落が増え、工場の勤め人が多いので旧集落との交流も少なく、氏子関係の習慣もない。

私も子供時代は、玩具は作って遊び、集落には娯楽設備はなかった。秋祭りなどはごちそうをつくり、踊りや相撲大会などで鎮守の森は賑わった。祖母や祖母と同じ年頃の人たちは、お寺やお宮にお参りしても合掌。家の氏神にも合掌。決して柏(かしわ)手をしなかつた。「手をパチパチ叩くのは神主さんのやることだ」と子供頃の頃、祖母に叱られた記憶がある。個人の宗教宗派の信仰は別

としても、お寺に詣でたら合掌。お宮に参拝したら柏手。日本人のこのスタイルは、いつごろからそうなったのか、簡

単な問題であるが、身近な人に聞いても分かりやすい答えは返ってこない。せいぜい、「人がやるから」「キリスト教の信者でないから」と笑い飛ばす。

神主とお坊さん

論理的なものかどうか、歴史と併合して考えてみたい。祖母が生まれた明治以前は、各藩とも神仏混合で、神主とお坊さんは一人二役を演じていた。仕事の主なものは、集落のよろず仲裁(家庭裁判所)、子供の名付親、葬式戒名を与え過去帳に記載(役所の戸籍係)、薬草から薬品の製造、病気の治療法(医者)、天候の占い(氣象庁)、進んだ集落は寺小屋塾等(義務教育)。集落の寄り合い集会所(公民館)で、顔役たちがそろって相談しても、知恵を絞ってくれる人物が神主であり、お坊さんであったことは、テレビ、映画を観ても想像・推察ができる。

徳川幕府体制が倒れて明治に至り、前述の通り、神主とお坊さんの役割と存在価値が薄れた。関東の集落のお寺は吸収合併、境内に墓地を造り生き残った。

近傍の稻荷神社の神主さんが、交通安全のお守りを売りに訪問されたので、「お付き合いですか」と買った。神主さんはいろいろと話されたが、「現在の子供たちは神仏崇拝の心が欠けている」と、嘆き悲しむ心情を訴えられた。そこで、前述した神仏混合の話を持ち出し、いろいろと質問してみた。私の問い方が悪かったのか、神主さんは何とも言えぬ顔でされた。

要点はこうだ。大学受験生

が祈願よりも難問の回答を求め、寺やお宮に押しかけたら、お坊さんや神主さんは逃げ出しはしないかと。

さて明治2年、新政府は旧来の寺社奉行を廃止、「神仏分離令」を出した。このため新政府も驚くような仏教排撃の嵐が全国に吹き荒れ、仏教の文化財が暴徒に破壊された。一番ひどかったのは信州の松本藩と薩摩藩である。(この原因は深いので省略)。鹿児島県には、首が落とされた石仏が現在もその名残として数多くあるが、一般には忘れられている。

思想変革

明治の新政府は国民に義務教育を課した(注・現在の政府は不登校の子どもたちの対策に苦慮しているが)。義務教育の重要なところは、読み書きソロバンはもちろんであるが、徳川幕府時代の道徳(修身)を大きく変えなければならぬ必要性があった。美徳とされていた仇討ちの禁止、藩の殿様や幕府に対する忠誠心が王政復古で天皇に忠誠心を切り替える思想変革が急務であった。

また、王制と国家思想を統一するため、新しい官制の宗教も必要となった。そこで出現したのが徴兵令の兵隊と菊の紋章のついた鳥居と貴族の服装と格好をした神主さんだ。

前述したように、役割と存在価値が失われたお寺の屋根はペンペン草が生え、住職は夜逃げしなければならなかった。下級武士が高級な官職につけた変動期でもある。優れた才能をもったお坊さんや神主さんたちは、職場を奪った新政府に救済を求め、彼らだけしかできない就職口(社(やしろ))が与えられたことは想像に難しくない。この社は国から手厚い保護を受け、伊勢神宮を頭に、神宮、大社、宮、神社等々、名称に順位があり、寺とは趣旨が異なる。国民は自然崇拜(太陽、月、

星、水、大地、稻荷神社、船神等)と先祖崇拝の宗教は捨てることはできないにしても、神話歴史を信じ、信じない言動をする者は国賊として容赦なく投獄。皇国史観を植えつけられ、知らず知らずの間に先祖たちの偉業を称えた鎮守神社でも柏手を打つようになった。この儀式は太平洋戦争中が最高潮に達している。祈りの目的が古来のものと大きく異なっていたことを明記しなければならぬ。

信徒と仏教徒に分離された国民は、本家を中心に曾祖父、祖父、親子、孫へと分離された宗教を引き継ぎ、今日に至っているが、氏子制度も檀家組織も先細りの状態。

現代人は宗教よりも科学を信ずる人が多くなつた関係もあるが、個人の宗教の自由は何人もこれを拘束はできない時代に突入している。これらの影響で、今日、宗教界は財政的にも困窮している。ともあれ、日本の神社仏閣は歴史の文化財であるから、宗教宗派に関係なく文化財保護として後世に残すべきであると、私の考え方を述べておきたい。

今日、政教分離と憲法に関する、いろいろな形で法廷で争われるニュースがあるが、私が述べたことと無関係ではなさそうである。

「私の講義は特効薬ではない。人生のなかで思い出してくれ」

教授の言葉をしのび筆を置く。

後書き

先生を書くのは、私にとっては長い道のりでした。子供たち2人は大学時代、先生の労作「倫理と社会」を開いている。どんな科目でもよいから、大学まで子供と話し合える親は、子供に尊敬されるものです。

(元組合員)